

國學院大學學術情報リポジトリ

北野剛著 『満蒙をめぐる人びと』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 良樹, Sakurai, Ryoju メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000445

書評と紹介

北野剛著

『満蒙をめぐる人びと』

櫻井良樹

勢いのある本である。この本は、著者がこれまでの研究でふれあった人物について、綿密な調査過程で見つけた史料にもとづき、あるいは感じた感覚を活かしながら、満蒙と日本人の関係をわかりやすく、かつ熱く語ったものである。しっかりととした史料にもとづくものであることは、外務省記録の隅々まで見て、そこからとても含意のあるフレーズやエピソードを引き出していることからわかる。たとえば郭松齢事件の際の郭の心境などは興味深い（一五六頁）。

著者の視点は、満蒙をめぐる日本の政策決定過程や展開を正面から扱うのではなく、満蒙という現場の最前線で行動した人々の姿を見つめることで、その場が持っていた引力を見出し、それを通じて満蒙とは日本にとって何であったかを考

えさせようとするところにある。扱う時期は、日露戦争から満洲事変に至る約二五年間であり、事変後に満洲国として満蒙が実体化した時期も触れられてはいるが、中心ではない。また本書は日本の満蒙政策を正面から論じてはいないが、しっかりとした満蒙と日本との関係史になっている。

著者は「満蒙」を、二〇世紀の東アジア国際環境と日本の大陸政策上の都合から生まれた地域概念と述べている（一三頁）ように、著者の思い入れは、実体化以前の満蒙にある。本書によると、この満蒙という概念は、陸軍経理部長の辻村楠造が初めて唱えたものであるという。辻村は、日本は日露戦後にロシアから引きついだ大連の都市計画を実現させるだけでなく、満洲およびモンゴルの地下資源に着目し、その開発をめざした人物であった。彼には、満蒙が総力戦体制を作る上で重要な生命線に将来なるというイメージがあったという。本書では、辻村をはじめとする各種日本人たちが、どのような未来構想を持ち、いかに満蒙にかかわったのか、そして実際に何をなしたのかを、時代順に扱っている。たとえば辻村と同様に、日露戦後に北満洲の農業や経済活動の可能性に注目した人物が、ノンキャリア外交官の川上俊彦であった。彼の構想は、極東ロシアと日本を結びつけるというものであり、それはすぐには実体化しなかったが、一部は一九二五年の日ソ国交回復後に実現された。

本書で取り上げられているのは、石光真清、辻村楠造、相生由太郎、川上俊彦、宇都宮太郎、薄益三、伊達順之助、駒井徳三、守田福松、笠木良明の十人である。軍人・大陸浪人・外交官・実業家・官僚・医師・思想家などと分類することもできるが、分類しにくい、あるいはそれを越境している人物も多い。この十人だけでなく、似たような人物も触れられている。たとえば大連商業会議所会頭となった相生のところでは、アヘンの商売で成功し同様に会頭となった石本鑽太郎が登場する。また片谷伝造という「実業家」か「大陸浪人」なのが曖昧な不思議な人物も登場する。日本本土に納まらず、また既成の社会的通念を超えて活動していたのが、満蒙という場で活躍した日本人の特長でもある。

たとえば薄益三と伊達順之助は、満蒙を舞台に縦横無尽の活躍をした人物としてイメージされる人物である。薄は、馬賊を名乗った大陸浪人で、満蒙独立を画策して実際に戦った民間人。伊達も同様で、彼は大正後半の大陸雄飛のロマン（満蒙ロマン）にそまって日本を飛び出した人であった（『夕日と拳銃』のモデルとされる）。馬賊となつて活躍したという話は、何か西部劇のイメージと重なり、それは少年雑誌を通じて拡散されていったものであったことも描かれているが、本書で貴重なのは、その「ヒーロー」の実態をしっかりと描いていることである。薄の活動は、日本の民間人によるさま

ざまな満蒙独立画策の一部であったが、彼は最後には活動に見切りをつけ農牧という経済活動に転換していく（しかし成功はしない）。伊達については、御用馬賊になるべくしてなつた姿が描かれる。

もう一つの特長は、取り上げられている人物の多くが、敗北者である点だろう。たとえばプロログで取り上げられる石光真清は、陸軍のエリート軍人のコースから下りて、満蒙における諜報活動に自分の生命をかけて従事した人物であるが、その生活は苦難に満ちたものだった。落ちこぼれたわけではなく、三国干渉の衝撃を受けて、ロシアとの対決という日本の姿を体現して、ロシアに語学留学し、満洲に入り馬賊と連絡を取ることに成功し、ハルピンで写真館を開き諜報網を作り上げた人物であった。著者は、自分の姿をありのまま記していると評価する石光の手記の中から、「清纯であった三十四歳の私の魂は悲痛な叫びで私自身の決意を促したのである」「私は後悔しないであろう」というフレーズを引用している（二三頁）。この言葉は、彼と日本のその後の姿を知っている私たちには、いっそう悲劇性を感じさせるものである。

もちろん参謀本部第二部長として辛亥革命時に満蒙工作を進めた宇都宮太郎（後に朝鮮軍司令官）や、満洲国の國務院総務庁長官となつた駒井徳三は、客観的には成功した部類の人物である。しかし本書においては、それぞれの思いを果た

せなかつた挫折者として描かれている。駒井は、満鉄での事業経営の最前線で活躍し名をあげた人物である。満洲産の大豆に注目したり、モンゴル羊の品種改良を手がけたりしている（一三六頁の「公主嶺試験場の羊」の写真は、さりげなく掲載されているが、きつとめずらしいものなのだろう）。第一次世界大戦後、満蒙開発が進展し、国策上でも満蒙への関心が高まっていた時期に、満蒙経営で奮闘する彼は、「国策」と結びつくいっぽうで、日本本国の政策に翻弄されることになった。その葛藤の背景を著者は、幣原外交には「拓殖」が欠けていた、「外交」のために「拓殖」に抑制的であつたと記す（一四〇頁）。そして満洲国建国後は、一時的には中心的位置に立つが（総務長官）、日本からやってきた官僚たちに反感を持ち、やがて挫折し一九三三年に日本に引きあげたと。

本書の第三の特長は、敗北者というところに通じるころでもあるのだが、国家政策の展開の観点よりも現地満蒙で奮闘努力する人々の努力を評価し、その努力と中央からの政策との間のズレや矛盾に注目している点である。駒井を描いたところ（一二九頁）や、大連港の埠頭業務刷新をまかされ、それを成し遂げた相生のところで、「会議室で決まったことがそのまま実行されるならば誰も苦労しない」「実際にそれを実行するのは人間である」「結局は個人の才覚と努力に行き着く」と述べる（四九頁）。そのいっぽうで、いち早く国家

方針へ対応する過敏さを持たねばならないという出先の最先端に立つ苦労と日本本国への依存性を見出す（五九頁）。自分の理想を支えてくれるものとして国による支えが必要なのだが、国は現地を理解してくれないし、容赦なく見捨てるのである。

最後の二つの章に登場してくる守田福松と笠木良明は、ともに現地で中国住民との親善関係の構築に努力した人物である。守田は医師として多くの中国人と関係を持ち、自身は奉天居留民会長となった人物であり、笠木は在満日本人思想団体・大雄峰会のリーダーとして王道にもとづく民族協和運動を進めた思想家であつた。しかしその理想実現は難しく、笠木の理想論は、急速な日本の膨張に追いつけず取り残されてしまう（一七七頁）。満洲から去つた笠木のその後は、ひたすら慰霊に意を注ぐことであつたという。その笠木の姿は、近代日本の歩みの実態を示していると著者は結んでいる。満洲事変によって、初めて満蒙がしつかりと実体化したが、それは、それまで満蒙に思いをかけて働いていた人々のイメージしたものとは異なつたものだったということである。

さて本書は研究書ではないので、細かい点について批評するよりも、感想的な紹介をする方が有益なのだが、最後に少し問題となるかもしれないことについて触れておく。著者は、本書で満蒙という場で活動した人物の姿を、余すところ

なく描いた。その際に彼らの勝手な思い入れがもたらしたマ
イナス面も描いているのだが、彼らの持つマジナル性や敗
北者的側面によって、悲劇の主人公になってしまっているよ
うな感じがする（誤読であれば御寛恕を乞う）。これは満蒙が
「無人の荒野」であれば、また別なのだが、日本が条約上有し
ていた満蒙権益を越境していこうとする動きや、それを誘発
する満蒙の持つ引力（イメージ）というものが、満洲国に収
斂していったのではなからうか。その点で、彼らの思いは、
ある程度実現されていたのではなからうか。

（四六判、一八四頁、彩流社、二〇一六年五月刊、定価一八〇
〇円＋税）

青木 敬著

『土木技術の古代史』

石 橋 宏

本書は古代の土木技術研究の第一人者として知られる著者
が、主に古墳時代から奈良時代の土木技術についてまとめた

著作である。一般向けの著書のため、平易な表現を使用して
いるが、古墳時代からの土木技術の推移とその技術がもどめ
られた社会背景、土木技術の系譜を東アジアまで見渡して追
求した高度な内容が取められている。厳密に区分できるもの
ではないが、國學院大学在籍時に古墳の調査と観察を基に古
墳築造技術の地域性に言及した学位申請論文『古墳築造の研
究』（六一書房、二〇〇三年）を發展させた内容と、その後の
奈良文化財研究所での終末期古墳、宮都や古代寺院の発掘調
査、海外での調査経験を踏まえて公表した成果を通時的、体
系的に整理したもので、本書は現段階での著者の到達点と捉
えられる。

筆者が考える本書の特徴は、著者が古墳や古代寺院などの
発掘調査において、土の特性を理解し、その土がどのようにに、
どの場所に、どの順番で積まれるのか、版築に盛り込まれる
小礫にまで気を配って技術体系を復元し、その類例を丹念に
調べ、東アジアを視野に入れて技術系譜と社会背景に言及す
る点にある。発掘調査で抱いた疑問がどのように解消され、
それが土木技術史のなかでどのような意義を持つのか、その
解き明かしてゆく過程は臨場感に溢れており、読者も一気に
読み進めることができる。

本書は、以下の七つの章構成からなっている。

土木技術と古代史―ブローグ